

スロヴァキア共和国における言語状況と 言語政策・言語教育政策について

長興 進

1. 概説 スロヴァキア語について
 2. 1989年の体制転換以後のスロヴァキアにおける言語状況
 3. 現代スロヴァキアの言語政策と言語教育政策
 4. 2007年3月の現地調査報告

1. 概説 スロヴァキア語について

スロヴァキア語 *slovenčina / slovenský jazyk* は、スロヴァキア共和国に居住する約 461 万人（2006 年現在）のスロヴァキア人の母語であり、また、チェコ共和国に居住する 18 万人／31 万 5000 人のスロヴァキア系市民や、アメリカ合衆国（51 万人／190 万人）、ハンガリー（1 万人／12 万人）、セルビアのヴォイヴォディナ地方（6 万 4000 人／8 万 5000 人）などに散在するスロヴァキア系移民の子孫のあいだでも話されている (1)。

表 1 1991 年と 2001 年の国勢調査結果に基づくスロヴァキア共和国住民の民族構成

Národnostná štruktúra obyvateľ'stva SR podl'a sčítania ľ'udu v r. 1991 a 2001

| Národnost' obyvateľ'stva | 1991 | | 2001 | |
|--------------------------|----------------|------------|----------------|------------|
| | N | % | N | % |
| slovenská | 4 519 328 | 85,68 | 4 614 854 | 85,79 |
| maďarská | 567 296 | 10,76 | 520 528 | 9,68 |
| rómska | 75 802 | 1,44 | 89 920 | 1,67 |
| česká | 52 884 | 1,00 | 44 620 | 0,83 |
| rusínska | 17 197 | 0,33 | 24 201 | 0,45 |
| ukrajinská | 13 281 | 0,25 | 10 814 | 0,20 |
| iná | 28 547 | 0,6 | 74 518 | 1,38 |
| SPOLU | 5274335 | 100 | 5379455 | 100 |

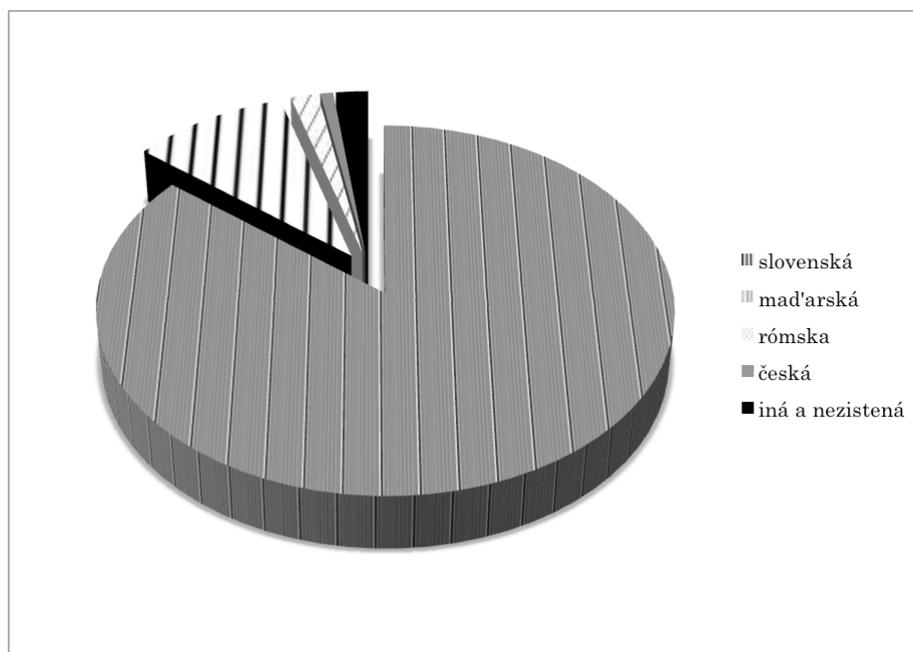
Národnost' obyvateľ'stva－住民の帰属民族、slovenská－スロヴァキア系、maďarská－ハンガリー系、rómska－ロマ（ジプシー）系、česká－チェコ系、rusínska－ルシーン系、ukrajinská－ウクライナ系、iná－その他、SPOLU－合計

出典－ A. Butašová a kolektív, *Jazyková politika v Slovenskej republike 2004. Jej východiská*

a smerovanie. Štátny pedagogický ústav, Bratislava 2006, s.12.

表2 2001年3月26日の時点でのスロヴァキア共和国住民の民族構成（相対比率）

Národnostná štruktúra obyvateľ'stva SR k 26. 3. 2001



iná a nezistená - その他と不明

出典 - *Jazyková politika*, p.12.

表3 2001年の「民族」と「母語」に基づくスロヴァキア共和国の住民構成

Štruktúra obyvateľ'stva SR podl'a národností a materinského jazyka z r. 2001

| Obyvatelia SR | | Materinský jazyk (%) | | | | | | | |
|---------------|-----------|----------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| Národnosť | Spolu | SJ | Md'J | RoJ | RuJ | UkJ | ČJ | NJ | Iný |
| slovenská | 4 614 854 | 96,65 | 1,20 | 0,82 | 0,62 | 0,03 | 0,18 | 0,05 | 0,31 |
| maďarská | 520 528 | 1,80 | 97,44 | 0,38 | 0,003 | 0,007 | 0,06 | 0,02 | 0,27 |
| rómska | 89 920 | 22,78 | 9,86 | 65,82 | 0,04 | 0,004 | 0,08 | 0,004 | 1,41 |
| rusínska | 24 201 | 4,86 | 0,15 | 0,07 | 94,01 | 0,34 | 0,15 | 0 | 0,40 |
| ukrajinská | 10 814 | 10,44 | 0,75 | 0,17 | 27,74 | 58,70 | 0,31 | 0,03 | 1,96 |
| česká | 44 620 | 15,22 | 0,95 | 0,20 | 0,10 | 0,04 | 82,17 | 0,16 | 1,19 |
| nemecká | 5 405 | 27,24 | 2,83 | 0,02 | 0 | 0,04 | 0,92 | 67,12 | 1,90 |

Obyvatelia SR - スロヴァキア共和国の住民、Materinský jazyk - 母語、SJ - スロヴァキア

語、MdJーハンガリー語、RoJーロマ語、RuJールシーン語、UkJーウクライナ語、ČJーチェコ語、NJードイツ語、Inýーその他、nemeckáードイツ系

出典ー *Jazyková politika*, p.13.

表3は、国勢調査の質問事項にある「民族」と「母語」に対する回答の相関関係を示す。横軸は「民族」を基準とした数値である。すなわち、「スロヴァキア系」と回答した461万4854人のなかで、96,65%は母語を「スロヴァキア語」と答えた者だが、ハンガリー語・ロマ語・ルシーン語などを「母語」としていても、民族としては「スロヴァキア系」を選択した者が、少数ではあるが存在することを示す。いっぽう縦軸は「母語」を基準としていて、民族としては「ハンガリー系」と申告した者のなかで、スロヴァキア語を母語とする者が1,8%を占めることを示す。スロヴァキア系やハンガリー系の場合は、「民族」と「母語」はほぼ重なる（民族が母語にしたがって選び取られる）が、ロマ系、ウクライナ系、ドイツ系の場合は、この相関関係がかならずしも直線的に成立していないことがわかる(2)。

スロヴァキア語は系統的に見るとインド・ヨーロッパ諸語のひとつで、チェコ語、ポーランド語、上ソルブ語・下ソルブ語などとともに、スラヴ語派の西のグループに属する。なかでも西隣りのチェコ語との関係はひじょうに近く、両語の標準語使用者は、たがいに母語で話しても、ほぼ完全に理解しあうことができる。これはスロヴァキア語とチェコ語が、多くの共通性を持った連続した言語グループから派生したためである。しかし歴史的環境のちがいによって、よく似た二つの文章語が成立することになった(3)。

大モラヴィア国崩壊後の11世紀、スロヴァキア地域は、ハンガリー王国の版図に組み込まれ、以来、19世紀中葉にいたるまで、国家の公用語としてはラテン語が用いられた。いっぽう土着のスラヴ語の方言を書きあらわす文章語として、15世紀以降、古いかたちのチェコ語、いわゆる聖書チェコ語(*bibličtina*)が導入され、おもにプロテスタントの福音派系スロヴァキア人のあいだで用いられた。

18世紀末にカトリック系知識人のあいだで、独自の文章語制定の動きが起こり、民族啓蒙家アントン・ベルノラーク(*Anton Bernolák*)の手によって、いわゆるベルノラーク語(*berňoláčtina*)が考案された。この文章語は西部方言に基づいて作られ、同時代の詩人ヤーン・ホリー(*Ján Hollý*)らによって用いられたが、福音派系知識人が、伝統的なチェコ語の使用を主張したこともあって、広い影響力を持つことができなかった。

1843年に、民族啓蒙家リュドヴィート・シトゥール(*Ludovít Štúr*)らが、より広く流通していた中部方言に基づいて、あらたに正書法と文法を制定した。この試みは1850年代初頭に、言語学者マルティン・ハタラ(*Martin Hattala*)らの手によって若干修正され

て、スロヴァキア文章語としての地位を確立した。

19世紀後半にはこの文章語によって文学活動が行われ、民族運動が展開された。しかしその影響力は、スロヴァキア民族運動そのものが相対的に小規模で、またハンガリー政府の側からの同化政策のせいもあって、19世紀後半を通じて限定されたものであった。1863年に開設された民族啓蒙文化団体マチツァ・スロヴェンスカー (Matica slovenská) も、1875年には閉鎖された。

スロヴァキア語の社会的発展にとって転換点になったのは、1918年のチェコスロヴァキア国家成立である (4)。同国の成立を契機に、スロヴァキア語の社会的地位は急速に向上した。1920年憲法では「チェコスロヴァキア語」規定によって、チェコ語との接近と融合の方向性が提示されたが、ナショナルな反発も大きく、1939年の第一次国家解体以降は、スロヴァキア語の独自性を強調する言語純化運動が活発化した (5)。

第二次世界大戦後にチェコスロヴァキア国家が復興され、1948年に社会主義体制が確立すると、スロヴァキア語の独自性は公式に認知されて、科学アカデミー言語学研究所などの制度的枠組みが整えられた。1950-60年代からは、アカデミー版の詳解辞典をはじめとする各種の辞書が刊行された。1969年のチェコスロヴァキア連邦化の際には、スロヴァキア語はチェコ語と同権の言語として、実質的に公用語としての地位を保障された。1989年の体制転換後、スロヴァキア語は連邦内のスロヴァキア共和国の公用語とされたが、1992年憲法ではあらためて国語と規定されて、同共和国の完全独立後の1995年に、国語法が制定された (6)。このようにスロヴァキア語は20世紀を通じて、国家の制度的な庇護を受けることによって、社会生活全般を担うことのできる近代的言語としての体裁を整えていったと言える (7)。

2. 1989年の体制転換以後のスロヴァキアにおける言語状況

1989年暮れまでの社会主義体制下のチェコスロヴァキアでは、1968年10月に可決された連邦法によって、スロヴァキア語はチェコ語とともに、法律発布と公用の接触で用いられる同権の言語と規定されていた (条文では「国語」あるいは「公用語」という表現は用いられていない)。同時に可決された少数民族法によって、ハンガリー系・ドイツ系・ポーランド系・ウクライナ (ルシーン) 系少数民族の言語は、彼らが居住する地域において、教育語・公用の接触の言語・印刷と情報の言語としての地位を保障された。

1989年暮れにはじまった体制転換プロセスのなかで、南部スロヴァキアに住むハンガリー系少数民族との共存問題に関連して、スロヴァキア語の法的地位が政治問題化した。スロヴァキア語を「公用語」と規定するリベラルな連立政府案と、「国語」と位置づける

ことを求めるナショナル派の提案が対立し、激しい政治論争が繰り広げられたが、結局連立政府案が採用されて、1990年10月に公用語法が可決された。スロヴァキア語はそれ以前も、実質的には「公用語」としての地位を持っていたが、それが法的に確認されたわけである。少数民族が人口の20パーセント以上を占める地域では、公用の接触の際に彼らの言語の使用も認められた。

チェコスロヴァキア連邦体制の解体が、現実の政治日程に上がってきた1992年9月、国民議会はスロヴァキア共和国憲法を可決した。その前文を注意深く読むと、「スロヴァキア民族」+「スロヴァキア共和国の領土に居住する少数民族とエスニック集団の構成員」=「スロヴァキア共和国の市民」という等式が浮かび上がってくる。同国が「スロヴァキア民族」のネーション・ステートであることを強調しつつ、市民原理との折衷が図られたわけである。スロヴァキア語に関しては、「公用語」ではなく「国語」という表現が採用された。

この憲法には「少数民族とエスニック集団の権利」という一章が設けられ、言語権については、「情報を普及させ受け取る」権利、「教育を受ける権利」、「公用の接触において使用する権利」に言及されている。これらの規定は、実質的には1968年の少数民族法をほぼ引き継いだ内容になっているが、「主権と領土的一体性の侵害」と「そのほかの住民の差別」（マジョリティであるスロヴァキア人への「逆差別」を含意する）に対する禁止条項（第34条3項）が付け加えられたことが、ネガティブな特徴として指摘されなければならない。

憲法におけるスロヴァキア語の「国語」規定を具体化するために、1995年11月、ナショナル指向が強かった第三次メチアル内閣の時期に、国語法が可決された。同法は、「国語は、スロヴァキア共和国の領土において用いられているそのほかの言語に対して優先権を有する」（第1条2項）と明記して、「国語」概念の排他性を表現している。その特徴は、「国語」としてのスロヴァキア語の「優先的」地位を、具体的かつ詳細に規定しているだけでなく、それらが遵守されなかった場合の罰則規定を定めていることである（第10条）。また国語法の可決にともなって、1990年の公用語法は廃止された（第12条）。

1998年10月の議会選挙の結果、メチアル内閣に変わってリベラル派のズリンダ内閣が成立し、1999年7月に少数民族言語法が可決された。少数民族が住民の20パーセント以上を占める自治体での公用の接触に、彼らの言語を使用することが、法的に保障された。この法律の可決によって、スロヴァキア全土にある2800以上の自治体のうち、512の自治体でハンガリー語、68の自治体でルシーン語、18の自治体でウクライナ語、57

の自治体でロマ（ジプシー）語、1つの自治体でドイツ語の公的な使用が可能になった。同時に国語法第10条の罰則規定が廃止されて、同法の威嚇的な性格が和らげられた。

スロヴァキア語の法的地位の問題は、国内に居住する少数民族、とくにハンガリー系少数民族の言語権と表裏一体の関係にあるために、きっかけがあればつねに政治問題化する可能性を内包している。

「スロヴァキア語の法的地位の政治問題化」以外に、J・カチャラ、R・クライチョヴィチ『スロヴァキア文章語史概観』（マルティン、2006年）(9)の最終章「1989年以後と独立したスロヴァキア共和国成立（1993年1月1日）以後のスロヴァキア文章語」には、最近20年のスロヴァキア語の言語状況の特徴として、以下の諸点が挙げられている。

1) 英語のプレステージの急上昇

「スロヴァキア語の言語接触における際立った変化は、これまでの政治的に動機づけられて支援されていたロシア語志向から、いきなり英語志向に転換したことである。この志向はもちろん、政治的・経済的な背景、さらには安全保障上の背景も持っているが、それは多くの影響力を持った人々において、我々固有の文化的・精神的な源泉の軽率な放棄と、外国の手本の品位を欠いた模倣のなかに現れている。このことは言語の分野において、たとえば、英語の語と言い回しの、それも概念的なものだけでなく、たとえば間投詞の度の過ぎた使用のなかに、製品・施設・商店などの英語の命名のなかに、テレビ・ラジオ番組の英語の名称のなかに、電子メディアにおける英語（と、当然なことに、さらにその他の外国語）の人名の順応されていない発音などのなかに現れている」（209ページ）

2) チェコ語との関係

「主権国家としてのスロヴァキア共和国憲法は、スロヴァキア語をスロヴァキア共和国の国語として認知した。この規範制定によって、さらにスロヴァキア共和国の成立自体によって、従来のチェコ語の地位も根本的に変化した。国語の地位からスロヴァキアにおいては、スロヴァキア共和国に居住するチェコ系少数民族の言語の地位におちいった。ふたたび直接の接触が断ち切られた点においても、新しい状況が訪れたが、スロヴァキア語とチェコ語は共同のチェコ・スロヴァキア国家において、そうしたなかで存在していたのである。それによって、とくに注意力の劣った使用者の表明において、チェコ語がスロヴァキア語に対して直接に影響を与える可能性も、本質的に弱まった。他面でこの影響は、スロヴァキア・チェコ共存の長い伝統の結果、またスロヴァキアにおい

てチェコ語でテレビとラジオ放送が視聴できる可能性の結果もあって、一定の方法によってさらに余韻を留めるだろうと想定できる」(209-210 ページ)

3) 公共の言語的表明のレベルの低下

「わが国における 1989 年の重大な社会的・政治的变化の後で、公共活動において発言しはじめた多くの人々のなかには、自分の公共活動（議会において国会議員として、高級国家公務員、経営者、企業家などとして）に対して、言語的にしかるべく準備のできていなかった人々もいたので、公共の言語的表明の全体的な文化水準は低下した。さまざまな民間の出版社、さらにまた電子メディアの放送内容やコマーシャルなどに影響力を持つ民間会社の影響によって、それまで全体として堅固だった、書かれて出版されたテキストや放送されたテキストの水準も、いくつかの点で動揺した。反面で社会的圧力（たとえば、読者の反響、あるいはマスコミ手段における視聴者の反響も、それについて証言しているように）、さらに言語学者とその他の文化活動家の、不断の言語文化活動と言語教育活動の作用によって、公衆の面前で発言する多くの政治家・国家公務員・経営者らにおける、スロヴァキア文章語の文化に対する姿勢に、段階的な変化が生じている」(210 ページ)

4) ジャーナリズム文体の重要性の増大

「学術的知識と専門的知識の表現と仲介の領域、および多様な社会的プロセスの管理の領域の重要性の増大に従って、ますますいっそう前面に出てきているのは、理論的かつ実践的な専門文体であり、あるいは別の観点からは、コミュニケーションの専門領域である。文章語の発展傾向の観点から、さらにまた、スロヴァキア文章語の使用者の形成途上の言語意識の言語的表明の多さの観点からも、コミュニケーション領域の体系において大きな意義を持っているのは、ジャーナリズム文体である。いくつかのジャーナリズムのジャンル、あるいは一連の新聞も、その話されたかたちにおいて生きた言葉の特徴づける諸要素としての、口語的・感情表現的・サブスタンダード的、あるいはスラング的な諸手段を、広く用いることによって際立っている。それゆえ話し言葉性は、現代のジャーナリズム表現のひじょうに重要な特徴と見なす必要がある」(210-211 ページ)

5) メディアにおける言語的レベルの問題

「大量の、また新しい出版物において、ジャーナリズム的諸手段とテキストは大きな

多様性へと発展し、著者のきわだった言語的な創意工夫を証言している。電子メディアにおいて大きな強調が置かれているのは、発信される番組の接触性で、それによってメディアの職業的な働き手、さらには招待されたゲスト（専門家、管理従業員、国家官僚、等々）と、電話をする聴衆の言語的な準備が発展している。なによりもディレクター、司会者、アナウンサーのしかるべき言語的準備のおかげで、スロヴァキア放送局の大部分の番組が、言語的レベルを有している。印刷されたメディアのなかで、伝統的な良質の言語的レベルを、細分化された文学的・ジャーナリズム的ジャンルの枠内で保っているのは、「文学週刊」（最近では「文学隔週刊」）であり、日刊紙では「プラウダ」のテキストの大部分である。通俗出版物においては、言語のレベルと社会評論活動のスタイルの低下も認められる」（211 ページ）

6) 地域方言と文章語の関係

「地域方言と文章語の結びつきは、芸術文体（ここでは、方言的諸要素とその他の非文章語的諸要素が、文学作品の形象、あるいは文学作品の環境を特徴づけるために用いられている）以外にも、通常の会話の言葉（その枠内ではとくに非公式の表明が、音声学的・語彙的、場合によってはさらに形態論的・統語論的な方言的諸要素、あるいはその他の非文章語的諸要素によっても彩られている）のなかに、より頻繁に現れている。著者の生まれた環境との一体性的手段としての方言的諸要素は、ジャーナリズム的表明の一部でも用いられている」（211-212 ページ）

7) 言語学者の活動

「スロヴァキア文章語の好ましい発展と社会的コミュニケーションにおけるその効果的な機能に寄与しているのは、言語学者たちのたえざる学術研究活動、規範制定活動、言語文化と言語教育活動である。スロヴァキア文章語の規範制定は、言語における新しい発展上の諸現象に対して、そして文章語の使用者のコミュニケーション上とその他の必要性に対して反応しており、その意味では規範制定上の干渉によって、基準とその規範制定を厳密化している。規範制定活動のこうした意図を裏付けているのが、1991年に出版された最新の『スロヴァキア語正書法規則』であるが、そのなかでは、とくにスロヴァキア文章語のいくつかの典型的な特徴、たとえば、形態論と語形成におけるリズムの法則の適用のような、典型的な特徴が強化されている。1998年の『スロヴァキア語正書法規則』の増補改定第2版と、2000年の改定増補第3版も、この路線を継承している」（212 ページ）(10)

同書の巻末では、次のような結論が下されている。

－「1940 年版『スロヴァキア語正書法規則』の出版後の時期のスロヴァキア文章語の状況についての説明の結論として、述べることができるのは、スロヴァキア文章語が現代において、好ましい諸条件のなかで発展していることである。－こうした諸条件は、スロヴァキア語とその担い手のこれまでの歴史全体において、もっとも好ましいものである。1930 年代末以降スロヴァキア文章語は、他の成熟したヨーロッパの諸言語の水準と比肩できる、高いレベルに達した。・・・スロヴァキア語の運命については、確かにすでに危惧を抱く必要はない。もちろん、その体系的で学術的な認識、学術的な記述と規範制定、獲得された新しい学術的な認識の出版、さらにまたその使用者の熟考された言語教育については、配慮する必要がある。使用者のなかで、おもにこの全民族的な価値に対する責任感を育成して、その発展と洗練化に配慮する体系的な努力を、支援することが必要である」(212-213 ページ)ここでは、とくに言語教育の必要性が強調されている点に注目しておきたい。

3. 現代スロヴァキアの言語政策と言語教育政策

現代スロヴァキアの言語教育政策の具体例として、本節では初等学校と中等学校における外国語の学習状況について、データ資料に基づいて概観してみたい。

現行のスロヴァキアの教育制度において第一外国語の学習は、たいてい初等学校 5 年度（11 才前後）から開始されるが、3 年度からはじめる学校もあり、実験的に 1 年度から外国語学習を導入する特殊な学校も存在する。第二外国語は初等学校 7 年度から、選択科目として取ることができる。外国語として生徒が選択できるのは、英語（AJ）、ドイツ語（NJ）、フランス語（FJ）、ロシア語（RJ）、スペイン語（šJ）、イタリア語（TJ）の 6 言語である。

表4 初等学校の低学年（1-4年度、6-10才）で外国語を学ぶ生徒の数

| ZŠ-1.st. | AJ | FJ | NJ | RJ | ŠJ | TJ | INÝ | NEUČ | Spolu |
|----------|--------|-----|--------|-----|----|----|-----|---------|---------|
| BA | 11 113 | 18 | 3 763 | 20 | 0 | 0 | 0 | 7 125 | 22 039 |
| TT | 6 704 | 0 | 2 829 | 0 | 0 | 0 | 0 | 13 807 | 23 340 |
| TN | 8 584 | 0 | 2 893 | 10 | 0 | 0 | 0 | 14 203 | 25 690 |
| NR | 8 857 | 93 | 2 607 | 55 | 0 | 0 | 0 | 18 149 | 29 761 |
| ZA | 8 542 | 14 | 2 420 | 0 | 0 | 0 | 0 | 23 534 | 34 510 |
| BB | 9 207 | 51 | 3 099 | 58 | 0 | 0 | 0 | 16 441 | 28 856 |
| PO | 12 063 | 0 | 3 416 | 117 | 0 | 0 | 0 | 28 707 | 44 303 |
| KE | 10 029 | 59 | 2 207 | 130 | 0 | 0 | 0 | 25 429 | 37 854 |
| Σ | 75 099 | 235 | 23 234 | 390 | 0 | 0 | 0 | 147 395 | 246 353 |

INÝ –その他、NEUČ–学習せず、Spolu –合計

BA–ブラチスラヴァ県、TT–トルナヴァ県、TN–トレンチーン県、NR–ニトラ県、ZA–ジリナ県、BB–バンスカー・ビストリツァ県、PO–プレショウ県、KE–コシツェ県、Σ–総計

出典– *Jazyková politika*, p.32.

スロヴァキアの初等学校の低学年（1-4年度、6-10才）に在籍する24万6353人の生徒のなかで、すでに7万5099人（30%）が英語、2万3234人（9%）がドイツ語を学びはじめている。少数だが、ロシア語（390人）やフランス語（235人）を選ぶ者もいる。地域偏差に注目すると、ロシア語の学習者は相対的に見て東部（プレショウ県とコシツェ県）に多い。この段階では、全体の60%（14万7395人）がまだ外国語を学びはじめていないが、首都のあるブラチスラヴァ県においてだけは、過半数（69%）がすでに外国語学習を開始している。

表5 初等学校の高学年（5-9年度、11-15才）で外国語を学ぶ生徒の数

| ZŠ-2.st. | AJ | FJ | NJ | RJ | ŠJ | TJ | INÝ | NEUČ | Spolu |
|----------|---------|-------|---------|--------|----|----|-----|------|---------|
| BA | 19 411 | 526 | 14 962 | 64 | 0 | 0 | 0 | 43 | 35 006 |
| TT | 18 277 | 689 | 15 908 | 190 | 0 | 21 | 0 | 80 | 35 165 |
| TN | 24 431 | 716 | 14 762 | 654 | 0 | 0 | 0 | 112 | 40 675 |
| NR | 25 089 | 469 | 17 874 | 800 | 0 | 0 | 0 | 93 | 44 325 |
| ZA | 31 106 | 840 | 17 470 | 755 | 0 | 0 | 0 | 80 | 50 251 |
| BB | 22 400 | 552 | 16 240 | 1 224 | 19 | 0 | 0 | 124 | 40 559 |
| PO | 33 673 | 829 | 20 718 | 6 664 | 0 | 0 | 0 | 148 | 62 032 |
| KE | 30 004 | 957 | 14 645 | 5 150 | 0 | 0 | 0 | 152 | 50 908 |
| Σ | 204 391 | 5 578 | 132 579 | 15 501 | 19 | 21 | 0 | 832 | 358 921 |

出典－ *Jazyková politika*, p.32.

初等学校の高学年（5-9年度、11-15才）に在籍する35万8921人の生徒のうち、20万4391人（57%）が英語を、13万2579人（37%）がドイツ語を、1万5501人（4%）がロシア語を、5578人（2%）がフランス語を学習している。ロシア語の学習者が東部に多い傾向は、いっそう顕著になっている。少数だが、スペイン語やイタリア語を選択する者もいる。この段階になると、生徒の圧倒的多数が外国語学習を開始している（学んでいない者は832人のみ）。

表6 8年制ギムナジウム（1-4年度、11-14才）で外国語を学ぶ生徒の数

| OGY 1-4 | AJ | FJ | NJ | RJ | ŠJ | TJ | INÝ | NEUČ | Spolu |
|------------|--------|--------|-------|-----|-----|----|-----|------|--------|
| BA | 3 543 | 363 | 2 063 | 65 | 277 | 0 | 18 | 0 | 6 329 |
| TT | 1 474 | 157 | 822 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 453 |
| TN | 1 553 | 238 | 767 | 44 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 602 |
| NR | 2 524 | 57 | 1 345 | 0 | 13 | 0 | 0 | 0 | 3 939 |
| ZA | 2 026 | 156 | 707 | 40 | 16 | 0 | 0 | 0 | 2 945 |
| BB | 2 272 | 311 | 1 305 | 2 | 32 | 0 | 0 | 0 | 3 922 |
| PO | 2 455 | 306 | 1 321 | 76 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 158 |
| KE | 2 475 | 381 | 908 | 70 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 834 |
| Σ | 18 322 | 51 969 | 9 238 | 297 | 338 | 0 | 18 | 0 | 30 182 |

出典－ *Jazyková politika*, p.33.

優秀な生徒を対象にして、大学教育を受けることを前提とした教育施設である8年制ギムナジウム（11才から教育を開始。ほぼわが国の中高一貫校に相当）では、1-4年度の段階で在学生の総数3万182人のうち、1万8322人（61%）が英語を、9238人（31%）がドイツ語を、1969人（7%）がフランス語を学習している。スペイン語やロシア語を選択する者も見られる。ギムナジウムの生徒は外国語学習を義務づけられており、一部の者はすでに第二外国語として選択している可能性もある。

表7 ギムナジウムで外国語を学ぶ生徒の数

| GYM | AJ | FJ | NJ | RJ | ŠJ | TJ | INÝ | NEUČ | Spolu |
|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|--------------|
| BA | 12 418 | 1 737 | 10 034 | 217 | 645 | 176 | 21 | 0 | 25 248 |
| TT | 6 620 | 1 059 | 5 218 | 78 | 216 | 91 | 0 | 0 | 13 282 |
| TN | 7 360 | 1 198 | 5 865 | 234 | 270 | 34 | 0 | 0 | 14 961 |
| NR | 8 249 | 479 | 7 033 | 66 | 365 | 198 | 0 | 0 | 16 438 |
| ZA | 10 341 | 1 763 | 7 485 | 375 | 665 | 0 | 0 | 0 | 20 629 |
| BB | 8 780 | 1 422 | 7 253 | 292 | 162 | 0 | 0 | 0 | 17 909 |
| PO | 11 026 | 1 423 | 8 813 | 907 | 237 | 86 | 79 | 0 | 22 571 |
| KE | 11 979 | 1 617 | 9 226 | 412 | 394 | 86 | 0 | 0 | 23 714 |
| Σ | 76 821 | 10 698 | 60 927 | 2 581 | 2 954 | 671 | 100 | 0 | 154 752 |

出典－ *Jazyková politika*, p.36.

ギムナジウム（8年制ギムナジウムの5-8年度と、4年制ギムナジウム）に在籍する15万4752人の生徒のうち、7万6821人（50%）が英語を、6万927人（39%）がドイツ語を、1万698人（7%）がフランス語を、2954人（2%）がスペイン語を、2581人（2%）がロシア語を学習している。この段階では、イタリア語やその他の言語を学んでいる者もいる。原則としてすべての中等学校で、2つの外国語の学習がカリキュラムに組み込まれている。

もうひとつ興味深いのは、スロヴァキアの初等学校と中等学校で外国語を教える教員の「資格」の問題を扱ったデータである。

表8 スロヴァキア共和国における資格を持った教師の言語別の概観

Celkový prehľad kvalifikovanosti učiteľ'ov v SR podl'a jednotlivých jazykov

| Jazyk | Učítelia spolu | Kvalifikovaní učítelia | | Sumár kvalifikovaných učiteľ'ov | |
|--------------|----------------|------------------------|--------------|---------------------------------|--------------|
| | | ZŠ | SŠ | Počet | % |
| AJ | 5 773 | 1 769 | 1 854 | 3 623 | 62,75 |
| FJ | 547 | 224 | 300 | 524 | 95,79 |
| LatJ | 63 | 0 | 52 | 52 | 82,53 |
| NJ | 5 358 | 1 905 | 1 917 | 3 822 | 71,33 |
| RJ | 1 202 | 742 | 329 | 1 071 | 89,10 |
| ŠJ | 61 | 1 | 50 | 51 | 83,60 |
| TJ | 22 | 0 | 20 | 20 | 90,90 |
| Spolu | 13 026 | 4 641 | 4 522 | 9 163 | 70,34 |

Učítelia spolu－教師の合計、Kvalifikovaní učítelia－資格を持った教師、ZŠ－初等学校、SŠ－中等学校、Sumár kvalifikovaných učiteľ'ov－資格を持った教師の数と割合、

LatJ－ラテン語

出典－ *Jazyková politika*, p.49.

初等学校と中等学校で外国語を教える教員の総数 1 万 3026 人のうち、9163 人 (70,34 %) が資格を有しているが、「スロヴァキアにおける外国語教師の全体的な資格は、満足すべき状態ではない」(同掲書、46 ページ)。とくに、もっとも「需要の多い」外国語である英語とドイツ語の教師のあいだで、有資格者が占める率が相対的に見て低い(資格を有する英語教師は 62,75 %、ドイツ語教師は 71,33 %)。この状態は初等学校において顕著で、中等学校における状況はましであるとされる。

最後に、外国語学校 *jazyková škola* における学習状況についてのデータを取り上げよう。外国語学校とは、学歴や年齢にかかわらず、職業上の必要性や自分の関心にあわせて外国語を学ぶことができる施設のことである。

表9 スロヴァキアにおける外国語学校に関するデータ

| Typ JŠ | Počet škôl | Počet študentov | AJ | Arab. jazyk | Čínsky jazyk | FJ | NJ | SJ | RJ | ŠJ | TJ | Japonský jazyk |
|-------------------------|------------|-----------------|---------------|-------------|--------------|--------------|--------------|-----------|-----------|------------|------------|----------------|
| Štátna jazyková škola | 14 | 20 771 | 12 791 | 47 | 18 | 1 524 | 4 897 | 28 | 90 | 786 | 380 | 30 |
| Jazyková škola | 5 | 3 026 | 2 122 | 0 | 0 | 103 | 636 | 0 | 0 | 101 | 64 | 0 |
| Súkromná jazyková škola | 9 | 3 765 | 2 983 | 12 | 0 | 81 | 647 | 0 | 0 | 22 | 20 | 0 |
| Spolu | 28 | 27 562 | 17 896 | 59 | 18 | 1 708 | 6 180 | 28 | 90 | 909 | 464 | 30 |

Typ JŠ－外国語学校のタイプ、Počet škôl－学校数、Počet študentov－学生数、Arab. jazyk－アラビア語、Čínsky jazyk－中国語、SJ－スロヴァキア語、Japonský jazyk－日本語、Štátna jazyková škola－国立の外国語学校、Jazyková škola－（通常の）外国語学校、Súkromná jazyková škola－私立の外国語学校

出典－ *Jazyková politika*, p.54.

スロヴァキアには、国立・通常・私立という3つのタイプの外国語学校が存在し、全国に合計して28校ある。聴講生の総数は2万7562人で、そのうち英語を学んでいる者が1万7896人（65%）であり、ドイツ語の6180人（22%）、フランス語の1708人（6%）がそれに続く。少数だが、日本語（30人）や中国語（18人）を学んでいる者もいる。ブラチスラヴァにある最大の国立の外国語学校には、2004/2005年に5709人の聴講生が登録し、10の外国語（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、日本語、中国語、外国人のためのスロヴァキア語）を学んでいる。最近の傾向として、ロマンス諸語への関心が高まっており、長年停滞していたロシア語への関心も復活しつつある。問題は、資格を有する教師が不足していることである。

4. 2007年3月の現地調査報告

2007年3月6日／午前9時半－午後1時

ブラチスラヴァのコメンスキー大学拡大教育センター（外国人学生の言語・専門教育準備施設）Centrum ďalšieho vzdelávania Univerzity Komenského / Ústav jazykovej a odbornej prípravy zahraničných študentov (ÚJOP), Žitkova 10, Bratislava を訪問。同センターは、スロヴァキアの大学に進学する外国人学生のための1年間の語学研修コース。リュドミラ・アーベロヴァー Ludmila Ábelová 施設長に、これまでの沿革、現状と問題点について説明を受ける。同センターは1960年に設置され、これまでに8000人以上の学生を送り出した。1989年の体制転換後、組織上の混乱と分裂があり、拠点の移転を余儀なくされた。施設長の説明を受けたあと、経済学専攻の進学予定者のクラスを見学。受講生の

出身国—ベトナム（女性 2 名）、ウクライナ（ウジホロト出身、男女各 1 名）、モンゴル（女性 1 名）、マケドニア（女性 1 名）、ブラジル（男性 1 名）、エクアドル（男性 1 名）。いずれも 20 才前後の若者で、旧社会主義圏と南米諸国の出身である。

3 月 6 日／午後 2 時より

コメンスキー大学哲学部 Filozofická fakulta Univerzity Komenského, Gondova 2, Bratislava を訪問。エヴァ・タンドリホヴァー Eva Tandlichová 教授に、スロヴァキアにおけるヨーロッパ共通参照枠（CEFR）の導入状況についての説明を受ける。教授は、スロヴァキア語版のガイドブック『ヨーロッパ共通言語参照枠』Spoločný európsky referenčný rámec pre jazyky（Common European Framework Reference）の校閲者の一人。同参照枠の A-1、A-2 は初等教育レベル、B-1、B-2 は中等教育レベル、C-1 は大学レベル、C-2 はネイティブ・レベルにあたるが、教授はこのレベル分けはあくまでガイドライン（指針）であることを強調した。

3 月 7 日／午前 9 時—午後 2 時

国立教育学研究所 Štátny pedagogický ústav, Pluhová 8, Bratislava を訪問。所長代理ナジヨヴァーNagyová 氏より、同研究所についての簡単な説明を受けたあと、午前 11 時より研究所内のセミナーに出席。参加者は 20—30 名程度で、全員が研究所の関係者。長與が 20 分ほどスロヴァキア語でプレゼンテーションを行う（自己紹介、今回のスロヴァキア滞在目的の説明—拡大 EU 諸国の言語政策、とくに 2004 年 5 月の EU 加盟以後のスロヴァキアにおける外国語教育とマイノリティ言語教育、および外国人のためのスロヴァキア語教育の現状の調査。補足的に日本の教育システムの概要、日本の大学における外国語教育の現状についても触れた）。その後に質疑応答。フロアからの質問—「日本にマイノリティ言語教育はあるのか?」、「ハンディキャップを持った生徒の教育はどうなっているのか?」、「外国人学生の扱いはどうなのか?」。その後、研究所側の 4 人の講師が、「スロヴァキアにおけるハンガリー系の生徒の言語教育について」と「ロマ（ジプシー）語での教育について」をプレゼンテーション。それに対する長與の質問—「ハンガリー系の生徒にとって、今日スロヴァキア語を学ぶ積極的なモチベーションはあるのか?」—答え「スロヴァキアで暮らしていくためには、スロヴァキア語の知識は必要。そのほかのインド・ヨーロッパ語族系の言語を学ぶ際の助けにもなる」。長與の質問—「ハンガリー系の生徒にとって、3 つの言語の学習〔母語＋スロヴァキア語＋英語あるいはドイツ語など〕は過剰な負担になるのでは?」—答え「むしろぎゃくで、子供の言語習得能

力は特別。同じ年齢のスロヴァキア系の生徒よりも成績が良い」

3月8日／午前11時

スロヴァキア科学アカデミー東洋学講座 Katedra orientalistiky Slovenskej akadémie vied, Klemensova 16, Bratislava を訪問。言語学者ヴィクトル・クルパ Viktor Krupa 氏と旧交を温め、かつ情報交換。クルパ氏と S・オンドレヨヴィチの共同執筆論文「言語的な神話」V. Krupa, S. Ondrejovič, Jazykové mýty, In: *Mýty naše slovenské*, Bratislava 2005. について情報を得る。カチャラとクライチョヴィチの新刊『スロヴァキア文章語史概観』に対する長興の批判的な感想に、クルパ氏も同意。

3月8日／午後12時半

コメンスキー大学日本学講座 Katedra japonistiky Univerzity Komenského を訪問。同講座の主任ペホ Pecho 氏、およびルジチコヴァー Ružičková 氏と情報交換。

3月9日／午前7時－午後6時

国立教育学研究所のベアタ・メンツロヴァー Beata Menzlová さんと、研究所の車でバンスカー・ビストリツァ Banská Bystrica とニトラ Nitra に「視察旅行」。バンスカー・ビストリツァ（中部スロヴァキア）のモスクワ通り2番地の初等学校 základná škola（9年制、日本の小学校と中学校に相当）を訪問。メリハーロヴァー Melichárová 校長とケレロヴァー Kellerová 副校長（初等教育機関の管理職と教職は、もっぱら女性で占められている印象を受けた）に、学校のカリキュラム、とくに外国語教育のシステムについて説明を受ける。－原則として、5年生から義務的に第一外国語を選択する。第一外国語はおもに英語だが、ドイツ語、フランス語、ロシア語の選択肢もある（制度的にはスペイン語、イタリア語も含まれるが、初等学校ではほとんど教えられていない）。8年生（日本の中学2年生に相当）の英語のクラスを授業参観。生徒数は13人（男6人、女7人）、教師は中年のスロヴァキア人女性。テディ・ベアのおとぎ話を、イラストを使って再構成させる方法。英語で積極的に発言させることに重点を置いている印象を受ける。教材のレベルとしては、英語圏の小学校1,2年生向け。最後の20分ほどを使って、長興が英語で自己紹介と質疑応答。

帰路にニトラ（西部スロヴァキア）の哲人コンスタンティノス大学 Univerzita Konštantína Filozofa のゲルマン学研究講座 Katedra germanistiky に立ち寄る。主任のミハル・ドヴォレツキー Michal Dvorecký 氏（28歳）に、同大学におけるドイツ語教育につ

いての事情を聞く。

3月10日／午前10時

コメンスキー大学教育学部 *Pedagogická fakulta Univerzity Komenského, Ul.Šoltésovej 2, Bratislava* を訪問。アンナ・ブタショヴァー *Anna Butašová* 氏に、スロヴァキアの言語政策についての話を聞く。彼女はパンフレット『スロヴァキア共和国における言語政策 2004年 その解決策と方向性』（国立教育学研究所、ブラチスラヴァ、2006年）(11)の責任編集者。さらに辞書編集のコンピュータ専門家ヴラジミール・ベンコ *Vladimír Benko* 氏に、スロヴァキア・ナショナル・コーパス *Slovenský narodný korpus* の概要についての説明を受ける。アクセスするためには事前に登録が必要で、コーパスに入っているテキストは、1989年の体制転換以後のデータが中心。

3月12日／午後2時－4時

スロヴァキア科学アカデミー・リュドヴィート・シトゥール言語学研究所 *Jazykovedný ústav Ľudovíta Štúra Slovenskej akadémie vied, Panská 26, Bratislava* を訪問。ヴィクトル・クルパ氏、研究所長スラヴォミール・オンドレヨヴィチ *Slavomír Ondrejovič* 氏と情報交換、およびコンサルテーション。最近刊行された詳解辞典『現代スロヴァキア語辞典』*Slovník súčasného slovenského jazyka. Bratislava 2006.* についての情報。－『スロヴァキア語辞典』*Slovník slovenského jazyka* (1959-1968年) 全6巻の完結以来、40年ぶりの総合的なアカデミー版の詳解辞典。全8巻を予定、収録語数20万語、主任編集者 *K. Buzássyová*、*K. ブザーシオヴァー*、*A. Jarošová*、*A. ヤロショヴァー*、10-12年で完結する計画。コンピュータ・システムの導入により、比較的短期間で編集・出版できるようになった。商業上の理由で、第1巻のCD-ROMは第2巻が出版されるときに発売する。

スロヴァキア文章語史については、やはりエウゲン・パウリニ *Eugen Pauliny* の著作が基本であることを確認。オンドレヨヴィチ氏も、カチャラとクライチョヴィチの新刊には批判的で、この分野では、リュボミール・ジュロヴィチ *Lubomír Ďurovič*、パヴォル・ジゴ *Pavol Žigo*、*Š. シヴァグロウスキー Š. Švagrovský* の仕事に注目するように、アドヴァイスを受けた。

注

(1) 在外スロヴァキア人の実数については、資料によって大きな差異が見られる。

- (2) この相関関係については、拙論「スロヴァキアのルシーン／ウクライナ系マイノリティー民族的アイデンティティ選択のメカニズム」『東欧史研究』（第26号、2004年）において、ルシーン系／ウクライナ系を例にして考察した。
- (3) 両語の関係については、拙論「似ているけれども違う、違うけれども似ている」『チェコとスロヴァキアを知るための56章』（明石書店、2003年）、25-28ページも参照。
- (4) 拙論「政治問題としてのスロヴァキア語—その法的地位をめぐる—考察—」『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』（早稲田大学出版部、2000年）を参照。
- (5) 拙論「『民族語』と『国家』の密かな関係—文章語史における独立スロヴァキア国期の評価をめぐる—」『地域間の歴史世界 移動・衝突・融合』（早稲田大学出版部、2008年）を参照。
- (6) 1992年憲法の関連箇所と1995年の国語法の翻訳は、『欧州諸国の言語法 欧州統合と多言語主義』（三元社、2005年）、353ページ以下を参照。
- (7) 以上の記述は、拙著『スロヴァキア語文法』（大学書林、2004年）、456-460ページに基づく。
- (8) 以上の記述は、拙論「スロヴァキア <解説> 「国語」および民族的少数者の言語に関する法律」『欧州諸国の言語法 欧州統合と多言語主義』、351-352ページによる。
- (9) J. Kačala, R. Krajčovič, *Prehľad dejín spisovnej slovenčiny*. Matica slovenská, Martin 2006.
- (10) この点について詳しくは、拙論「最近のスロヴァキア語の動向—体制転換以後の新しい語彙と語義説明の変更をめぐる—」『西スラヴ学論集』（第8号、2005年）を参照。
- (11) A. Butašová a kolektív, *Jazyková politika v Slovenskej republike 2004. Jej východiská a smerovanie. Štátny pedagogický ústav, Bratislava 2006*. 現代スロヴァキアの言語政策と言語教育政策の全体像を概観するために、参考資料として同書の目次を訳出しておく。

序論

第1章 スロヴァキアにおける言語政策の一般的コンテクスト

- 1.1 スロヴァキアに関する基本データ
- 1.2 言語状況の歴史的断片
- 1.3 現代の言語状況の特徴づけ
- 1.4 みぶり言語（ボディーランゲージ）
- 1.5 少数民族の諸権利の立法上の保障
- 1.6 スロヴァキアにおけるロマ人とロマ語
 - 1.6.1 ロマ語の正書法上の規範制定のコンテクスト

スロヴァキア共和国における言語状況と言語政策・言語教育政策について

1.6.2 学科目としてのロマ語の確立

1.7 在外スロヴァキア人に対する配慮

1.8 グローバル化時代のスロヴァキアにおける移民

1.8.1 スロヴァキア語の学習

1.9 スロヴァキア共和国における外国人のためのスロヴァキア語

第2章 スロヴァキアにおける言語教育の可能性

2.1 教育システム

2.1.1 学校と学校施設の運営

2.2 初等学校における言語教育システム

2.2.1 母語と国語の学習

2.2.2 外国語の学習

2.2.3 少数民族の言語で授業を行う学校における外国語の学習

2.3 中等学校における言語教育システム

2.3.1 スロヴァキア語の学習

2.3.2 外国語の学習

2.3.3 少数民族の言語で授業を行う学校における国語の学習と評価

2.3.4 中等学校におけるバイリンガル部門

2.4 外国語学習のための教育的文書

2.5 スロヴァキア共和国における教科書政策

2.5.1 教科書の作成

2.5.2 スロヴァキアで使用されている外国語の教科書

第3章 外国語教師の養成

3.1 外国語教師の資格

3.2 外国語教師の専門的な言語教育と教育学上の教育のあいだの関係

3.3 初等学校の低学年のための教師養成

3.4 初等学校の高学年と中等学校のための教師養成

第4章 学校外の教育

4.1 外国語学校

4.2 課外活動の概観－オリンピックとコンテスト

4.2.1 外国語

4.2.2 国語と母語

第5章 言語能力の評価－試験とテスト

5.1 外国語としてのスロヴァキア語の試験

5.2 外国語の試験

討論のための諸問題

結論に代えて